志賀直哉全集未収録資料紹介補遺

生井知子

昨年、私は、「甲南国文」（平成五年三月）、「芦屋市谷崎潤一郎記念館ニュース」（平成五年六月）、芦屋市谷崎潤一郎記念館第十二回特別展図録「志賀直哉と谷崎潤一郎」（平成五年七月）において、志賀直哉の全集未収録資料の紹介を行なったが、その後入手した資料が若干あるので、ここに紹介する。

《逸文》

☆昭和三十六年十月十日　柳宗悦編『濱田庄司作品集』（朝日新聞社）

「濱田庄司君のこと」

この文章は、昭和三十六年、濱田庄司の作陶四十年を記念して東京三越百貨店で開催された回顧展を機に出版された柳宗悦編『濱田庄司作品集』の巻末に、「濱田庄司の作品に就いて」の総題の下に掲載されたものである。他に、柳宗悦『濱田庄司の仕事』、河井寛次郎『濱田は呼ぶ』、B・リーチ『濱田と私』、濱田庄司『解説にかへて』が掲載されている。『新版　濱田庄司作品集』（昭和四十一年十一月二十五日・朝日新聞社）にも再録された。この文章の第四・五段落（セント・アイヴス……感じた。）は、『濱田庄司作品集』内容見本にも掲載され、全集第十五巻には「『濱田庄司作品集』推薦」として収録されているが、ここでは全文を紹介する事とする。

＊　＊　＊

濱田庄司君のこと

志賀直哉

四十一年前、我孫子の柳宗悅の家で、私は初めて濱田庄司君に會つた。濱田君はその頃柳の屋敷内に窯を造つたリーチに會ひに來たのだ。私が行つた時にはリーチは留守だつた。濱田君は自作の美しい辰砂の茶碗を柳に見せてゐた。柳は未だはつきり民藝運動に踏切つてゐない時だつたが、自身の勉强以外に陶磁器の蒐集に凝つてゐたから、濱田君はさういふ小物も其日見せて貰つたらうと思ふ。柳は李朝あたりから入つて、志野なども買つてゐた。柳の眼はその頃から既に確かだつた。

間もなく、リーチが英國に歸る事になり、それについて濱田君も英國に渡り、リーチの仕事を手傳ふ事になつた。この結びつきはリーチの爲めにも、濱田君の爲めにも、ひいては民藝運動の爲めにも大變いい結果を齎したと思ふ。

リーチはその時よりも十年程前、エッチング畫家として日本に來て、何年かして富本憲吉君と共に六世乾山の弟子になり、樂燒を始めたが、陶工としての技術は未だ極く初步で、その點、高工以來、河井寛次郎君と共に正規の勉强をし、更に京都の陶磁器試驗場で勉强して來た濱田君の助力はリーチにとつては鬼に鐵棒のやうなものだつたらう。リーチは濱田君によつて作陶の本格的なテクニックを學び、濱田君はリーチから藝術としての作陶に新しい眼を開かれたといふ關係だつたと思ふ。

セント・アイヴスといふ英國の最南端の海岸にあるリーチの窯場で、濱田君は三年餘りリーチと一緒に仕事をした。そして還つて來ると、直ぐ栃木縣の益子といふ昔からある、水甕、擂鉢等雜器類を專門に作る窯場に自身の窯を築き、總てその土地の材料で仕事を始めた。

私はある時、偶然、銀座の伊東屋で何點かの濱田君の作品を見たが、何年か前我孫子で見せて貰つた辰砂の茶碗とは餘りの變りやうに驚いた。水甕や擂鉢と同じ柿釉の小さな壺や寸胴の花生だつたが、部厚い、思ひ切つて不愛想な物で、その頃、未だ東京にあつた荒物屋の店さきに轉がつてゐさうな陶器だつた。私は作品そのものには何の魅力も感じなかつたが、前に美しい辰砂の茶碗を作つてゐた人がわざ〳〵英國まで行き、勉强して歸つて、今、かういふものを作り始めたといふ事、その事には興味を感じた。

柳達の民藝運動の始まつたのはそれから間もなくだつたやうに思ふ。私はその頃奈良に住んでゐたから、柳と會ふ機會も少

なく、精しい事は知らなかつたが、大阪の濱田展、河井展には毎時、奈良から出かけて行つた。京都五條坂の河井君の民藝風の家にも何度か訪ねた事がある。

その後、私は東京に住むやうになり、上野の國展に行つた時、先づ梅原龍三郎の繪に感服し、會場を廻はつて見て、それに比敵するとまでは行かなくとも、梅原の繪を受止めるだけの作品を求めて見て廻はつたが、遂にさういふ作品に出會はず、いささか物足らぬ心持で工藝の部屋に入り、その一隅に飾られた濱田君の大きな角皿を見て、思はず立ちつくした事がある。たしかに梅原の繪をがつちりと受止めてゐると思つた。古い美術品の持つ何か威嚴のやうなものが感じられた。その日私は梅原の繪、そして濱田君の角皿、この二つを收穫とし、滿足して歸つて來たが、以來、毎年、暮れにある三越の濱田展は見に行くやうになつた。

前に圖錄を見た時にもさう思つたが、濱田君の作品はいつも同じやうな物でありながら、幾つあつても不思議に單調にならず、新鮮な感じがする。

濱田君の人柄に就いては先年柳、濱田、私の三人で二ヵ月程歐洲を廻はつた事があり、その時の經驗からいふと、如何にもよくバランスのとれた人といふ印象を受けた。私は老年の故に體力的に續かず、北歐、米國等をも一緒に廻はるつもりだつたが、遂に落伍し、ロンドンで別れ、パリにゐる梅原と落合ひ、先に日本に歸つて來た。

もう一つ濱田君で想ふ事は仕事と生活とを結びつけ、うまく調和さしてゐる點だ。濱田君の仕事の性質から云つても大切な事で、ここに濱田君の強味がある。觀る者の側から云へば濱田君の作品は何か安心して觀られるといふ事になる。濱田君は民藝運動の精神を體得した賢い陶工だといふ事が出來る。

尙、濱田君が柳や河井君達と美しい民藝品を求めて、全國隅々までも歩き、その發見に盡した功績は大きい。

《座談会》

☆昭和三十四年二月二十五日　「毎日新聞」夕刊

「映画「いたづら」を語る」

中村登・阿川弘之・志賀直哉・野尻抱影・有馬稲子

［昭和三十四年二月二十二日］

昭和三十四年二月、志賀直哉原作の『いたづら』が、山岡役・高橋貞二、田島役・杉浦直樹で、松竹によって映画化

された。その試写会を見た後に、監督の中村登、原作者の志賀直哉、志賀直哉に材料を提供した野尻抱影、出演者の有馬稲子、志賀直哉の推薦した阿川弘之によって行なわれた座談会である。昭和三十四年二月十八日付阿川弘之宛の葉書に《二十二日は「いたづら」試寫會と座談會と續く（中略）二十二日の座ダン會カントクと有馬稲子ともう一人若い人といふ事で君にして貰ひたいといつて置いた、出られたら、お頼みする》とあるのが、この座談会である。なお、この座談会の掲載先については、阿川弘之氏の御教示を受けた。篤く御礼申し上げる。

＊　＊　＊

志賀　結構な出来だった。非常に面白い、いい映画になったね。

中村　どうもありがとうございます。先生が大変簡潔に書かれたものを、すこしごちゃごちゃと筋を入り組ませてしまったので、原作のニュアンスが出ればと、そればかりつとめて考えていました。

志賀　きょうはこの材料を僕に話してくれた野尻抱影さんにも試写を見てもらったので、ここへお連れしてきたんだ。

野尻　僕が明治四十三年ごろ甲府の中学の英語教師をしていた。そのころこんな話が実際にあってね。僕は中学の書記をしている佐多という男と組んで、こらしめの〝いたづら〟をした張本人―つまり杉浦直樹さんの役どころだ。

有馬　まあ、そうですの。

野尻　僕の役が大変な二枚目なのでうれしくなった（笑）。とにかく、そういうことで、この話を志賀さんにしたら大変興味をもたれてね。それで書かれたのがこの原作なんです。

志賀　高知のロケはおおごとだったらしいね。

有馬　正味十六日やりましたけど、ほんとうに毎日大変な人出でしたわ。私なんかも足はふまれるし、長いつけ毛をひっぱられちゃうし……。

志賀　この映画が成功したのは、山岡という男を愛すべき人物にしたことだと思うね。高橋貞二君もなかなかよかった。小説の方は多少悪意をもって書いてあるからね。

阿川　だまされ続けていた彼が、何も知らないままで出征していく前ね、あそこで彼が田島（杉浦）の肩をたたいて「君の夢を育てたまえ」というところは味がある。

志賀　そうだね。

野尻　あそこで僕は思わずホロリとした。偽のランデブーで人をだますなんて決してあと味のいいもんじゃない。それをこ

のようなラストにすることによって、とても救われる。

志賀　連隊長の赴任地を旭川にして、山岡の偽ラブレターと一致させたところがシナリオの苦心なのだろうね。

野尻　僕は佐多が「おなんど色のネクタイ」のラブレターは自分が書いた—と謝罪してしまうので、おやおやこの映画は一体どうやってしめくくりがつくのかと心配したが、実にまあ見事に完結にもっていったのでほっとしましたよ（笑）。

志賀　ラストで田島が「君去り春山誰と共に遊ばん」ともう一度いうが、あれは大変よかった。言葉の気持がよくわかる。

有馬　杉浦さんの声のボリュームもいいのでしょうね。

志賀　有馬さんはとってもきれいだった。小説にはない人物だったのにね。

有馬　昭和十二年ごろの連隊長の娘などという役はいままで考えてもみなかった役なんで、ずいぶん迷いました。何か正田美智子さんの感じじゃないかと思ってやったんですけど…。

志賀　なるほどね。正田さんていうのはああいうのかね。

有馬　さア、それは…。

中村　古風なタイプですからね。有馬さんなんかも抵抗を感じるでしょう。

有馬　ええ、「軍人の娘が軍人の妻になるほど自然なことはない」っていうセリフは、しゃべってて、自分でおかしくって（笑）。

阿川　ラストで汽車のデッキの恋人との別れのシーンね、あそこで有馬さんは何だかとっても小さくうつっているようで感じが出てた。うまいなと思った。

志賀　有馬君はとても芝居がこまかい。こないだ「彼岸花」を見た時、両手で顔をおおって泣く芝居があったけど、指先にギュッと力がこもってて感心した。

有馬　まあ、先生は本当に細かいところまで見ていらっしゃるんですね。なんだかこわいですわ。

《書簡》

☆大正九年八月二十七日　畑耕一宛（東京市糀町町[ママ]有楽町一ノ二　東京日々新聞社）〔はがき〕

我孫子町より

当時「東京日日新聞」の記者を勧めていた畑耕一宛の葉書であり、『暗夜行路』の連載に関するものと思われる。『暗夜行路』は、「大阪毎日新聞」のみに掲載予定だったと思

われがちだが、「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」双方に掲載される予定だったのである。[注1] 時期も、この葉書によって、菊池寛の「真珠夫人」（「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」に大正九年六月九日から十二月二十二日まで連載）の後が考えられていた事が分かる。なお、この葉書と「志賀直哉全集・月報16」掲載の大正九年[注2]十月七日付薄田泣菫宛書簡を合せて考えると、九月十日[注3]頃に畑耕一に渡した二十回分の原稿がきっかけで、『暗夜行路』の新聞連載が取り止めになった事が分かる。

（注1）「ノート15」にも、大正九年三月執筆と推定される〈大阪毎日 東京日日〉時任謙作――800枚〉というメモがある。

（注2）月報では、大正八年とされているが、大正九年六月二十七日付の薄田泣菫宛書簡等との対応関係から考えても、大正九年の誤りと思われる。

（注3）大正九年九月四日・九日・十四日・二十五日付の杉田英男宛葉書によれば、この時期、志賀直哉は強羅の別荘に滞在しているので、畑耕一との実際の面会の日時は変更になった可能性がある。

＊　＊　＊

おハガキ拝見しました、菊池氏の後のつもりで今書きつゝあります、それからもう一度出す前にお会ひしたいと思ひます、

来月十日上京してその晩麻布区三河台町二十七志賀（電芝一八四）に泊るつもりです、若しその日の午后乍御面倒来て頂ければ好都合だと思ひます、その折り二十回分位をお渡し出来ます、薄田さんへは直接お便りしませんが此事貴方からお傳へ願ひます、

※付記
この調査は、平成五年度文部省科学研究費補助金による研究成果である。